

レーザーコンパス

マラソン流と駅伝流

阪口 光人*

Mitsuhito SAKAGUCHI*

寒風について走るマラソンレース中継に、つい身を乗りだして見るのは、私だけではあるまい。42km余をひたすら走るランナーの姿に、人生そのものを感じずる人も多いという。“道”を究めることを求める日本人向きの競技の1つである。今から10年程前までのマラソンレースで勝つ作戦は、前半は第二集団あたりを自分のペースで走り、後半30~35kmで疲れの出してきたトップ集団をとらえ、一気にトップに出て、ゴールにとび込むのが最上とされてきた。しかし、現在のスピードマラソンでは、最初からトップ集団に居ないことには、勝つことはおぼつかない。そして、30~40kmにかけて生き残りゲームが展開され、TV中継を見ている我々も引き込まれる、すじ書きのないドラマが生まれるのである。

企業での研究・開発に25年間関係してきた私には、このマラソンレースの展開の変化を、つい研究・開発のやり方の変化とオーバーラップさせて考えてしまう。1975年頃までは、まず欧米の優れた研究・開発に追いつくのが第1であり、製品化の段階でやっと追い抜くというのが実力であったように思う。しかし、最近では、研究・開発の最初から欧米あるいはむしろ日本勢とのトップ争いを演じながら、製品化までの長い競争を続けなければならない状況である。また、

トップ集団についていけなければ脱落するのみの競争である。このような競争は、良い製品をより早くユーザに提供するためのものであるから、全体としては悪い競争ではないが、技術者には“一流ランナー”としての高い能力が求められる。

ところで、駅伝レースは、日本の発明した競技のようなものであるが、最近は世界にも広がる勢いにある。特にマラソンと同じ距離を数人でリレーするレースは、ランナーが変わる度にレースの流れが変わり、スリルに豊んだ競技である。それぞれの区間の特徴に合った能力をもつランナーが、責任をもって走り、チームワークにより勝利を得るレースである。1人1人のランナーは、マラソンランナーほどの力がなくとも、耐久力あるいはスピードなどの自分が得意とする能力を生かして、チームとして一流マラソンランナー以上の短かいタイムを出せる面白さがある。一流の高校チームならば、超一流のマラソンランナーと同程度のタイムで走りきることができる一方、このような一流のチームを構成し、指揮する監督はマラソンランナーを育てるコーチ以上に複雑で高度なマネジメントが要求されることは明らかである。

日本企業の研究・開発は、従来このような駅伝流により、“良いタイムを出す”という成果

* 日本電気(株)光エレクトロニクス研究所所長 (〒213 川崎市宮前区宮崎4-1-1)

* Opto-Electronics Research Laboratories, NEC Corp. (4-1-1, Miyazaki, Miyamae-ku, Kawasaki, 213)

を上げて来たのではなかろうか。この駅伝流は、日本人の能力と個性にうまく合った、日本で発明され育てられた手法であろう。マラソン流を信条とする欧米から見れば、肌の合わない方法と言えるかもしれないが、その良さは徐々に認識されつつあるように思える。駅伝流の最も良い所は、すべてには一流でない若い技術者も参加させて、全体としては一流の成果を上げると同時に、いわゆる“マラソンレース”にも参加できる一流の若い技術者を育成する場にもなる点にあると考える。

光エレクトロニクスは1980年代に入って、事業として成り立つレベルに達したことから、研究開発競争は一段と激しくなっている。この競争には、すでに市場が見えていて、より高性能

なものをより低価格で提供するための開発競争と、新しい概念や応用を発明し新市場を開拓するための研究・開発がある。従来、我々は目標が明確な高性能競争を駅伝流で勝ち進むことに注力して来たように思う。しかし、今後は、このような駅伝流で育ってきた若い技術者に、

“ゴールが見えないマラソンレース”に挑戦してもらい、そこで鍛えられ、新しい道を開く世界一流の研究成果を上げてほしいものとする。

また、このようなランナーを組込んだチームを構成しない限り、世界に通じる駅伝チームも出来ない段階に達しているとも考える。

昨秋、広島で開かれた、第1回世界駅伝大会で、日本チームが惨敗したことは、他人事ではすまされない気持である。